

令和7年度

白根百田小学校 学校関係者評価書

- 1 日時 令和8年1月30日(金) 17:30～18:30
2 場所 白根百田小学校 図書室
3 出席者 学校関係者評価委員 6名

1	秋山 君裕	小中一貫教育推進委員
2	小田 切英史	小中一貫教育推進委員
3	清水 正学	小中一貫教育推進委員 PTA会長
4	加賀爪 宏美	百々自治会会長
5	佐藤 雅彦	上八田自治会会長
6	福井 健司	主任児童委員

学校からの参加者 校長 教頭 計2名

4 議事の概要

(1) アンケート結果に基づく質疑応答(詳細)

委員より：ICT活用、教科指導(理科・外国語)、および保護者への情報発信について、以下の通り具体的な質疑・提言をいただいた。

① タブレット端末の持ち帰りと活用実態

【委員の指摘】

タブレットを毎日持ち帰っているのか。家庭で子どもが活用している姿を見る機会が少なく、保護者としては実際にどの程度活用されているのか判断しづらい面がある。

【委員の提言(公開研究会の参観を踏まえて)】

5年生の授業を参観した際、先生が自作している教材データは非常に質が高いが、作成の負担が大きいと感じた。市販ソフトや既存のコンテンツをより有効に活用することで、教員の負担を減らしつつ、全校的な活用率を底上げできるのではないか。

② 理科における電子教科書・動画の活用

【委員からの質問】

理科の授業で電子教科書は導入されているか。電子教科書内の実験動画などは、子どもの視覚的な理解を深めるのに非常に有効である。動画を活用することで、授業の効率化や理解度の向上に繋げてほしい。

【学校側の回答】

現在、電子教科書やデジタル教材の活用を進めている。実験の事前確認や、対面での実験が難しい場面での動画活用は、児童の理解を助ける大きな武器となっている。今後も効果的な場面での活用を推進していく。

③ 外国語（英語）教育の現状と可視化

【委員の指摘】

これからの時代、英語が使えることは不可欠だが、現在の授業がどのようになされているか、アンケート結果からは見えにくい。ALT（外国の先生）は来校しているのか。具体的にどのような活動をしているのか、教科別の満足度や達成度をアンケート等で吸い上げると、より実態が見えるのではないか。

【学校運営への提言】

英語に限らず、各教科の学習の様子を積極的に保護者へ発信してほしい。学校での頑張りが見えることで、家庭での話題になり、保護者の安心や理解にも繋がるはずだ。情報発信の工夫を検討してほしい。

(2) 学校評価のまとめ（提言と期待）

委員の皆様より、今年度の本校の教育活動および学校運営の総括として、以下の通り評価と激励をいただいた。

① 【学校目標の達成】

「チーム学校」としての推進

「白根百田小学校の先生方は非常にしっかりしており、力のある集団である」との高い評価をいただいた。同時に、個々の教員の能力に頼るだけでなく、教職員同士が密に意思疎通を図り、「チーム」として協力して学校運営にあたることの重要性が強調された。

対話と連携

教職員が共通のビジョンを持ち、互いに高め合える関係性を築くことで、より質の高い教育活動が展開されることを期待するとの声をいただいた。

② 【組織的な学校運営】教育現場における「PDCA サイクル」の継続

経営手法への評価

本来、製造現場等で用いられる「PDCA（計画・実行・評価・改善）」の概念を学校現場に導入し、客観的なデータ（アンケート結果等）に基づいた運営を行っている姿勢について、肯定的な評価をいただいた。

改善の継続

単に評価（Check）を行うだけで終わらせず、次なる改善（Action）へと確実に繋げていくこのサイクルを継続すること。この積み重ねが、学校をより良くしていく唯一の道であるとの助言をいただいた。

③ 【確かな学力】 書く力の育成と家庭学習の定着

「書く力」の重要性と評価

本校が重点的に取り組んでいる「書くこと」について、低学年からの積み重ねが着実に実を結んでいると高い評価をいただいた。書く力は語彙力を豊かにし、コミュニケーション能力や「話す力」の土台となるものである。文章化する力が高まっている現状を維持し、今後も継続してほしいとの期待が寄せられた。

家庭学習の習慣化と宿題の精選

長年取り組んでいる家庭学習の啓蒙を継続すること。その際、学級によって宿題の量に差があると保護者の不信に繋がるため、学年内での統一感を保つことが重要であるとの指摘をいただいた。

定着のための反復学習

学習は「やりっぱなし」にせず、振り返りや繰り返しを行うことで長期記憶として定着する。学力をつけるという学校の本分を全うするため、定着を意識した指導を求めていく。

④ 【豊かな心】 挨拶がつくる安心・安全な関係

挨拶を通じた信頼構築

挨拶運動の継続を評価しつつ、性別による傾向や家庭での取り組みの差についても意見が交わされた。昨今の社会情勢から「知らない人への挨拶」を控える傾向もあるが、挨拶を交わすことで「相手が分かり、それが安心・安全につながり自分の身を守る」という挨拶の本質的な意味を子どもたちに伝えていく必要がある。

大人こそ見本に

「子どもは大人の背中を見ている」という視点から、学校だけでなく家庭・地域でも大人が見本を見せていくべきであり、学校からも家庭へ積極的な働きかけをしてほしいとの提言をいただいた。

⑤ 【健康・安全】 家庭の防災意識向上と地域合同訓練の提案

アンケートからの課題

学校評価の結果から、「家庭で子どもと防災について話す機会が少ない」という課題が浮き彫りになった。これを受け、いかにして子どもや保護者の防災意識を高めるべきかについて、委員間で協議が行われた。

体験を伴う訓練の重要性

意識向上のための解決策として、単なる知識の習得や避難経路の確認にとどまらず、自治会と学校が連携した「実践的な合同訓練」の必要性が提言された。具体例として、他校での事例（簡易ベッドの組み立てや水供給の練習など、実際の避難所運営に近い訓練）が挙げられ、親子で参加し体験することが家庭での話題作りや意識改革に直結するとの意見をいただいた。

⑤ 【地域連携】地域行事への参画とコミュニティの持続可能性

地域行事の現状と成果

自治会や育成会との連携の重要性が再確認された。百々地区の12月の正月飾り(古いお札)集めでは、例年になく多くの児童が参加したという明るい兆しが報告された。こうした地域行事への関わりを継続していくことが、地域愛の醸成に繋がると評価された。

価値観の多様化への対応

大人が主導する育成会活動が中心となっている現状を受け、子どもの価値観が多様化していることも踏まえつつ、いかに子どもたちが「自分たちの行事」として愛着をもてる仕組みを作っていくか、地域と学校が共に考えていく必要がある。

⑥ 【小中連携】中1ギャップの解消と9年間を見据えた教育

中学校進学への意欲向上

中学校の入学説明会に参加した児童が、刺激を受けて算数の復習を始めるなど、進学を控えた意識の変化が具体例として挙げられた。中学校の生活や学習を具体的に知ることで、子どもたちが小中連携を知り、意識の向上に直結していることが確認された。

「チーム9年間」の基盤づくり

高学年だけでなく、低学年のうちから中学校を意識した交流機会を模索してほしいとの要望があった。特に、百田小学校と源小学校が中学校で合流することを踏まえ、小中9年間を通じた「学習・生活の基本的なルール(土台)」を共通化し、スムーズな接続を図っていくことが重要である。

また、部活動の楽しさを伝えたり今回のように芸術作品を掲示・展示したりするなど、中学校への希望を持たせる交流を今後も継続し、9年間の連続性の中で子どもを育てていく視点を共有した。

本委員会でもいただいた貴重な御意見を真摯に受け止め、職員へ周知共有するとともに、次年度の教育活動に可能な範囲で反映していく。特に「チームとしての学校運営」と「地域・家庭との可視化された連携」に重点を置いて取り組んでいきたい。